
No.832が刻む道

けい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

No.832が刻む道

【コード】

N0488BA

【作者名】

けい

【あらすじ】

多分更新も超ノロノロとするつもりなのでそれでも見る、という物好きさんだけ見てってください。

第0話（前書き）

相変わらずの駄作ですが、よかったら見てってください

第0話

「おい！そつち居たか！？」

壁の向こうから声が聞こえる。俺は今まで動きっぱなしだったために乱れている息を整えながらその声に意識を向ける。

「いや、居ない！そつちは！？」

「こつちもダメだ！」

「クソツ、もう一度探すぞ！アレを捕まえなきゃ俺たちの首が飛ぶんだ！」

「了解！」

その言葉を区切りにバタバタと走り去っていく音が聞こえた。

一先ず脅威は去ったらしい。思わず安堵の息を吐く。

しかし、次の瞬間、俺の顔に光が当てられる。見つかった
！！

「居たぞ、こつちだ！」

俺を見つけた男が大声を上げる。男は目の部分を覆う黒いバイザーを付けているので正確には分からないが20歳くらいの顔立ちで、防弾チョッキの様な物を着込み、腰には特殊警棒を提げ、手には光量から明らかに軍用と分かる懐中電灯と恐らくは本物と思われるハンドガン P226が握られていた。

俺は男が声を上げた瞬間に男に背を向けて逃げる。すると恐らく発

砲してきたのだろう、バン、という音が辺りに響いた。と同時に左肩に衝撃と焼けるような痛みが襲う。

「ウグ!?」

俺は思わず呻き声を上げた。しかし立ち止まる訳にもいかないので痛みを無視して走る。追って来ているであろう男を撒くために何度も道を曲がり、そうして10分ほど走ったところで走るのを辞めた。俺が立ち止まったところはどうかやらかの工場跡らしい。撤去されていない工具などが乱雑に転がっている。しかし、身を隠すには好都合だろう。そう判断して鉄骨の陰に身を潜める。ついでに未だ血を流し続けている左肩の傷の応急処置を施す。といっても出来るのは止血くらいだが。

処置が終わったところで改めて体を見渡す。

上下灰色の囚人服に両手に付いている鎖の切れた鉄製の手枷（ちよつと無骨な鎖の付いたブレスレットだと思えば何とか・・・無理か?）、靴は無いので素足だ。今は夏だからまだマシだが冬だったらと思うとゾツとする。後は、首に鉄で出来た首輪が嵌められている。といってもこれは壊れているからいつでも取り外せるだが。そして、視界にチラチラと映る腰まで伸びた闇色の髪と相も変わらず今尚そこに在るであろう紅く輝く眼とこの眼のチカラを封じ込めている黒いカラーコンタクト。

とそこまで考えたところでふと疑問に思う。

「（何故この逃走劇で眼のチカラを使わなかったんだ?）」

しかし次の瞬間には自分で答えを返す。

「（あいつらに見つからないため。あいつらはこのチカラの感知には長けているから。）」

故に使わなかったのではなく使えなかったのだ、と思考を続けた。そのとき、まだ遠いが複数の足音が聞こえてきた。だからこれまでの思考を中断しすぐさま逃走用の思考に切り替える。だが頭の片隅では己がこんなことをしている原因を思い返していた。

その日は大晦日だった。

街を歩く人は皆厚着をして足早に歩いていた。俺もそんな人達の内
の一人だった。・・・あの事件が起こるまでは。

人類進化ウイルス無差別配布事件。

これは大晦日に全国各地の商店街で試食品を装って行われた。後で聞いた話だが、この事件による被害者は約80万人にも及び、その内人類進化ウイルス 正式名称 Human Evolution、通称 H E に適合出来なくて死んだ人は約35万人で、完全に適合出来ずに寝た切りの状態の人が約44万人、完全適合した人は約1万人しか居らず、ソレもその後の日本政府の保護という名目で引き取られて実験、研究に使われて死んで行き、今では約2千人しか居ないらしい。

さらに厄介のことに、この完全適合した人も個人個人によって発生するまでの時間も発生したチカラも違うらしい。俺の知り合いには念力が使えるようになった奴が居れば単純に身体能力が異常に上がったって奴も居る。更にこのチカラはチカラの入切が出来る「アク

タイプタイプ」とチカラがずっと入の状態のままの「パッシブタイプ」に別れ、このどちらもチカラが入の時に体の何処かが変化するらしい。念力の奴はアクティブで額に真つ黒の角が生えるし、身体能力の奴はパッシブで背中に紋様が刻まれるらしい。

俺のチカラは直視した己以外のモノを物理法則を無視して分解することらしい。タイプはパッシブで変化は眼が紅く輝くことだそうだがこのチカラのことが分かった時はチカラを封じるコンタクトが出来るまでただひたすら目を瞑っていた。

連中も恐かったんだろうな。目を開けば自分達は見られるだけで分解され、監禁しようにも部屋ごと分解される。幸運だったのは俺がその時はまだ発生していなかったと言うことか。まあとにかく、連中は必死にチカラ封印のコンタクトを作ってくれた。だが、そこからが地獄だった。

毎日毎日実験を繰り返す日々。

ある日は妖しい薬を打たれた。ある日はH Eに感染しなかった傭兵を分解した。ある日は俺のチカラの限界を調べると言ってとにかく分解を使わせられた。

実験を繰り返す度に神経が磨り減り磨耗していった。

最後にはいつか脱走するという希望に縋って生き延びてきた。

そして遂にそのときが来た。

研究所が何者かの襲撃にあったのだ。そのときの衝撃で俺の居た牢屋の壁が崩れ、俺の両手を拘束していた鎖が切れたのだ！

すぐさま崩れた壁から脱出し、研究所から抜け出したのだ！しかし、現在地が分からずうろろろしていたところを研究所の警備員に見つかり逃げ回っていて、そこから冒頭に戻る。

「ハッ、ハッ」

俺は意識を回想から現実に戻した。そろそろ意識を回想に回す余裕がなくなってきたからだ。

あの後逃げ回っている最中に雨が降ってきて、今では豪雨となっている。後ろからは雨の音のかき消されながらも警備員達の声が聞こえてくる。待て、言っているようだが何処の世界に待てと言われて待つやつが居る！無視して走り続けた。しかしすぐに立ち止まることになる。理由は、いきなり目の前に大きな川が広がったからだ。雨の所為で見えなかったのだろう。立ち往生していると後ろから、ガウンツ！

銃声が響き、銃弾が右足に当たる。血が飛び散る。

「ツ！？」

転倒するのは何とか避けたが代わりに追い詰められた。振り返ると6人の警備員がそれぞれ懐中電灯とP226を手に包囲しようとして近づいてきている。

背水の陣、てか？

そう考えるのと同時に右手を目に当てる。コンタクトを取るのだと勘違いした警備員達が此方に銃を向けて何かを言っているが雨の所為で聞こえない。黙っていると一人が焦って引き金を引こうとして周りに止められている。ソレを見ながら俺は笑い、後ろに跳んだ。

「！？」

警備員達が驚いたような気配を感じた直後、俺は雨の所為で水位が上がった川に音を立てて落ちた。そして水に流されながら気を失っ

た。

第1話

目を開けると、知らない天井だった。

「・・・んあ？」

声を漏らして起き上がると、ここどこだ？、と呟いた。

と同時に気を失う前の状況を思い出してベッドから跳ね起き、辺りを警戒する。見たところ、壁も床も天井も全部木で出来ていて、どこか田舎な印象を受ける。

ガチャ、と扉が開く音がしたから勢いよく振り返る。

「・・・・・・あ」

そこには薄い蒼色の髪を腰まで伸ばしていて水色の眼を持った物静かなイメージがある16歳くらいの美少女が水の入った桶？のようなものを抱えて立っていた。

「・・・大丈夫？」

「へ？あ、うん、大丈夫。どこも痛くないし・・・」

とここまで言っただけで気が付いた。

気を失う前は左肩と右足を撃たれていた筈なのに全く痛みが無い。それにあれだけ走り回ったのに筋肉痛にもなっていない。それどころか手に付いていた手枷がなくなっているし服装も囚人服から黒い布で出来たズボンに上半身裸になっていた。

俺はズボンを指差して、

「これ、君が・・・？」

彼女は首を縦に振った。

俺としてはこれは外れていて欲しかった問いなので、肯定されて頂垂れる。が、すぐさま気持ちを入れ替えてお礼を言う。

「状況から見ると、君が俺を治療してくれたんだよね？ありがとう。ついでといつちゃ何だけど、俺を見つけたときの状況を聞いてもいいかな？」

彼女 リーズというらしい から聞いた話を纏めると、俺は村から少し離れたところにある川の近くに倒れてたらしい。怪我をしていたし体が濡れて衰弱していたからその場で魔法一（！？）を使って怪我を治療してこの家に持って帰って体を温めてくれたらしい。放っておいたら死んでいたらしいのでホント感謝だ。

ちなみにこの村の名前は「クレイス」というらしい。嫌な予感を感じてこの国の名前を尋ねたら不思議な顔で「・・・グリバニア」と答えしてくれた。

魔法、家の中に一つも家電製品が無いこと、聞いたことの無い国名、とくれば俺だつて連中に捕まる2年半前までは現役の高校生だったんだ（まあ今も本来なら高3の筈だったんだが）。ここが異世界もしくは平行世界であることは想像が付いた。だから俺にも魔法が使えたりするかも！？と意気込んで使えるかどうかリーズに聞いてみたんだが、

「・・・残念だけど、あなたには魔力が感じられない。だから無理」

と言われたので魔法は泣く泣く諦めた。が、よくよく考えれば俺にはチカラがあるじゃないか、と考えを無理やりポジティブな方向に

持っていてこうとした。・・・今まで忌み嫌ってきたチカラに頼るとはなあ、と考えたら落ち込んだが。

「・・・ところで、聞いてもいい？」

「ん？」

俺が思考の海に潜っていると、リーズが声を掛けて来た。

「・・・あなたのその両眼の術式は何？」

「・・・術式？」

はて？なんのこと？と考え込んでいると、リーズがさっきの質問を補足してきた。

「・・・あなたのその両眼に嵌めているナニカに刻まれた恐らく何らかの封印術式と思われる術式と両眼に直接刻まれてる・・・崩壊？術式のこと」

「ッ！？何故このチカラのことが分かる!？」

チカラのことを言い当てられてしまったってつい怒鳴ってしまったが、すぐにハッとなって頭を下げる。

「・・・すまん。怒鳴ってしまって」

「・・・別にいい。此方こそごめんなさい。あなたの事情に踏み込んでしまったって」

「いや、それはいいんだ。ソレより、この眼について知ってることを教えてくれ」

「・・・分かった。まず、あなたの眼には何らかの崩壊術式が刻まれている。眼に嵌めているナニカはソレを封印するためのものだから恐らくは出力の入切が効かないんだと思う。そしてその崩壊術式は・・・恐らく見たもの全てを崩壊させるんだと思う。ここまでで何か異なる事はある？」

「いや、特に無いな。強いて言えば崩壊じゃなくて超強力な分解だ」

「・・・効果は一緒。問題ない。じゃあ続ける。この術式の前例は神代まで遡る。この術式を持っていたとされるのは魔神バロム。この神はもつと強力で対象に意識を向けるだけでその対象は崩壊したと言われている。次に、英雄神キルス。彼は右手にこの術式を持っていたとされている。」

「すごいな、魔神バロムとやらは。と呑気に考えているとリーズが此方に詰め寄ってきた。って何故に!？」

「・・・聞きたい。あなたはどうかやってこの術式を手に入れたの？」

「ってああ、そういうことか。」

「俺は思わず入っていた体中の力を抜こうとし、しかし緊張の所為でうまくいかずに強張ったままリーズにここに至るまでの経緯を話し始めた。」

「いいか?これから話すことは嘘でも冗談でもない。全部本当の話なんだ。だから疑わずに聞いてくれ。あれは・・・」

「……ということがあって、後はリーズが知っている通りだよ」
とここまで話して一息つく。流石に喋りっ放しは疲れた。

「……なるほど。分かった」

おー、分かったのかソレはスゴ……ってえ”！？

「え、本当に分かったの？俺の話は傍から聞くと突拍子も無い戯言
だと思っただけど」

「……大丈夫。理解してる。だから私がこの世界のことを教える。

」

「え、それはありがたいんだけど、いいの？」

リーズは頷いて、

「……今日はもう遅いから明日から」

そう言って座っていたベッドから立ち上がってドアに向かう。

そうしてドアを開けたときに立ち止まって此方を振り返り、

「……そういえば名前聞いてない。」

そう言った。っておおっ！ホントだ。

「そういえばそうだな。俺の名前は……あー連中にはNo.83
2って言われてたな。本名は実験の時に副作用で忘れたし、好きな

よじに呼んでくれ」

「・・・分かった。なら、エイトと呼ぶことにする」

そう言っつてリーズは今度こそドアから出て行つた。

「にしてもエイトか。安直すぎね？まあいいけど」

そう言っつて俺はまたベッドに横になつて目を瞑る。すると思つた以上
に疲れが残つていゝのかすぐに睡魔がやつてきた。だんだんと意識が
落ちていく。そういえばなんで言葉が通じてるん・・・だろ・・・
うな・・・zzz。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0488ba/>

No.832が刻む道

2012年1月2日01時48分発行